合宿のテーマをめぐって——感想二、三

下出宣子

3月22、23日、金沢の犀川河畔の宿で、「T．イーグルトン『文学とは何か』を読む」と題し、当代文学研究会の初めての合宿が行なわれた。遠方からの参加、非会員を含め、予想外に多くの参加者が集まり、中国現代文学のあり方をめぐって、下出鉄男・宇野木洋両氏の報告を受け、多岐にわたって討論が行なわれた。

イーグルトンは『文学とは何か』（"Literary Theory : An Introduction" 1983）において、先ず序論で「文学」というカテゴリーが客観的に存在するものではなく、文学を構成する価値判断が歴史的変化をうけるものであること、さらにこの価値判断が社会的イデオロギーと密接に関連しているということを明らかにする。本論ではこの前提のうえに、英文学批評（18世紀以降の文学概念の変化、リーヴィス、エリオット、新批評、エンプソン）、現象学批評、解釈学、受容理論、構造主義、フォルマリズム、ポス構造主義、精神分析批評等の、「文学」を対象として扱ってきたさまざまな文芸批評を歴史的に解説し、それらが帯びている社会的イデオロギーとその限界を明らかにしている。この著作の中ではマルクス主義文芸批評については述べられていないが、イーグルトン自身はマルクス主義者であり、かつフーコーの影響を強く受け、デリダのディコンストラクションへの強い共感を持っている。ディコンストラクションの形而上学批判、支配的・特権的理論体系批判の方法がイデオロギー批判の可能性、社会変革の永続的可能性を胎みながら、デリダ自身の分析が「社会制度にまで拡がらず、哲学上の概念や言語に制限されたままに留まっている」（マイケル・ライアン『デリダとマルクス』、今村・港道・中村訳）こと、「反復と差異を強調することそれ自身も、英米の批評家達がやってみせているように形而上学に転化しうる」（同前）ことに不満を抱く。イーグルトンのめざすのは、ディコンストラクションとマルクス主義の結合——マルクス主義を政治批判の武器として用いること、逆に言えばディコンストラクションにマルクス主義の持つ社会性を持たせることである。これは、いわば、ライアンのいう「批判的」マルクス主義の立場に通ずるものであろう。ボルシェビズムからみれば、それは具体的な権

力奪取のための組織論を欠いたものとみえるかもしれないが、中国における６・４事件をはじめ、東欧諸国の「自由主義化」、ソ連でのバルト三国独立運動など社会主義体制の破綻が顕在化してきた今日、それがマルクス主義の批判的哲学としての理論的再構築の唯一の道ということになるのだろうか。抑圧的な権威的中央集権国家の形態をとったソビエトモデルの社会主義（「科学的」社会主義のイデオロギー）及び資本主義と切りはなし難く結びついている「父権制」を批判するためか、この著作の最後は精神分析批評とフェミニズムを結合させたクリステヴァを登場させている。また、イーグルトンの他の著作には、ディコンストラクション的課題を先取りしたと彼が考えるマルクス主義者、ベンヤミン、バフチン、アドルノらについて論じられており、それらは我々にさまざまな問題を提起し、さまざまな可能性を感じさせてくれる。

宇野木さんの報告によれば、80年以降中国では、劉再復が「この『新時期』10年間、社会は急激に変化しており、文学も劇的な変化を遂げつつある。“西方”における19世紀から20世紀にかけての文学の変化過程が、この10年間に凝縮され、改めて展開・進化しているかのようである」（「近十年的中国文学精神和文学道路」、『人民文学』88.2）と述べている如く、“西方”の文学理論、文芸批評理論の移入とその展開は「すさまじく、現在日本で紹介されているものほとんどすべてが中国で紹介されているようである。“西方”理論の無条件移入のレベルからの脱却という課題にとり組む動きがかなり進んでいるとのことだが、まださまざまな理論や方法論が無秩序にあるようだ。それらの理論の研究がマルクス主義を革新させる可能性をもってはいるが、まだマルクス主義との関連が不明確なままであると報告されたが、多くの若い研究者はむしろ脱イデオロギーの方向でそれらの理論をとらえ、用いようとしているのではないか、ちょうど欧米で、当初構造主義がアンチ・マルクス主義の意味あいをもったように。（これらの無秩序な氾濫が権威的中央集権的な現体制に揺さぶりをかけるという意味ではイデオロギーとしての力をもつわけだが。）少なくともこれらの理論が今年春からの民主化運動を導いたとはいえないだろう。若者たちが脱マルクス主義、脱イデオロギーの方向に進んでいる今、中国で、イーグルトンはどのように読まれるのだろうか。